

からこかぎ

第8号 平成26年10月31日(金)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1 青垣生涯学習センター唐古 鍵考古学ミュージアム内

Tel. 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

東京講演会を企画して

9月14日に東京・神田お茶の水にあります明治大学リバティタワーにおいて『唐古・鍵遺跡』の弥生講座を開催しました。

今年は、私達の所属する『唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会』が発足して10周年を迎えることになり、何か記念事業を行いたいと話合ってきました。

そこで、日頃「唐古・鍵遺跡」と接する機会の少ない首都圏の方々に、遺跡を知っていただきたいという趣旨で、弥生文化講座の開催を決定し、今年度の定期総会で了承されました。また、会員の中で東京にお住まいの方が2割程いらっしゃるというのも心強い限りでした。

準備段階では、6月に会場探しと日程決定・企画相談、7月にポスターやビラ作りをして博物館・史学科のある大学・民間友の会・図書館・考古学講座の会場などに配布しました。又、奈良からのスタッフ募集と宿舎確保・交通手段を手配しました。8月には、応募していただいた方々に参加はがきを送付したり封筒の印刷をしたりして事務局の仕事も活気づいて行きました。後援して頂いた教育委員会の教育長・片倉照彦先生の後押しもあって、貴重な冊子を頂き、産業観光課からも田原本町の資料を頂いたりして、夢が現実になづくのを感じました。会員の中に『絵画土器に描いているシカを折り紙にして、封筒に入れて差し上げよう。』との提案があり、包装紙を集める者・10cm大に紙を切る者・そ

副会長 今西 和代



れぞれに折る者と2週間で400頭のシカを折る事ができました。9月に入り、資料の印刷と組み合わせをして封筒に入れて350部を東京に送ることにしました。

14日の朝に奈良のスタッフ8名が、京都駅に集合して新幹線に乗り正午には東京に着きました。明治大学リバティタワーホールに着いた時には、もうすでに東京のスタッフの方々が会場準備をあらかじめして下さっていて、教室の前には参加者が列をつくって待っていました。

1時から受付を行いました。20分程で会場はいっぱいになり、急遽お借りした50席の補助椅子も参加者で埋まっていきました。1時半になり、会場の定数が266名のところ300名を超える盛会で講座がスタートしました。時折、会場内を見渡すと目を爛々と輝かせ前を見ていらっしゃる方々に感動しました。休憩時間になっても誰一人として退席されませんでした。それどころか、『随分遅れたんですけど入れますか?』と、駆け込んで来られた方もいらっしゃいました。

講座が終わってからは、『全て満足』『来年も開いて欲しい』『ぜひとも奈良の唐古・鍵遺跡に行きますね。考古学ミュージアムにも。』という声を聞かせて頂きました。また、『資料を分けて欲しい』と何人もの方が来られ、今回の講座を開催して本当に良かったと思えました。

その夜、宿泊した施設からは東京スカイツリーが輝かしく青色の光を放っていました。

今回の講演会開催に協力頂いた方々に感謝致します

「今年もコスモスを咲かそうプロジェクト」のご参加ありがとうございました。

運営委員会

今年も、無事に咲かすことができました。田原本町の呼びかけで始まった「遺跡にコスモスを咲かそうプロジェクト」は、3年経ちました。今年は、出芽が遅く、その結果花の咲く時期が例年より遅れました。昨年の見事な出来映えに比べれば少しコスモスの花も少ないように思えました。

しかし、7月26日・8月30日・9月13日・9月27日と出芽の遅れから、日程を2週間ずらすこととしましたが、延べ92名の参加を頂き、早朝より心地よい汗をかきました。特に9月13日は、東京講演会をひかえた前日にもかかわらず22名の方に参加いただき、雑草が多いため2時間半ほど草引きをしました。

最終日には、お亡くなりになった川原忠美さ

んに黙祷をささげて終了しました。

遺跡のコスモスの写真をご覧ください。



全国新酒鑑評会

1 全国新酒鑑評会出品酒の公開

平成26年5月28日東広島市の運動公園アクアパーク体育館において、平成25酒造年度全国新酒鑑評会（酒類総合研究所主催）の製造技術研究会及び公開きき酒会が開催されました。鑑評会には全国から全部で845点の清酒が出品され、平成26年4月22日～24日に予審が、5月8日～9日に決審が行われました。審査の結果、442点が予審を通過して入賞しました。

植田 洋高

また、入賞した清酒の中から特に成績が優秀であった233点が金賞を受賞しました。

2 平成25年度金賞受賞酒・奈良県

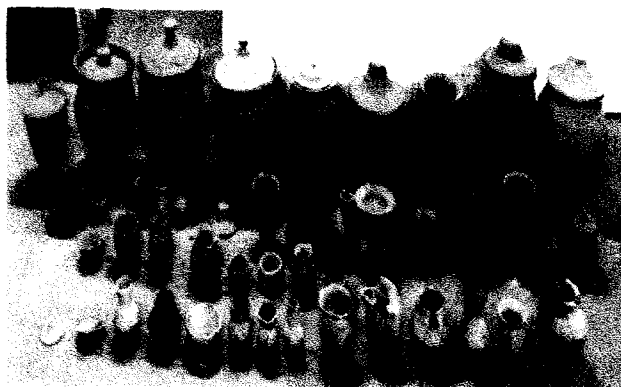
今西清兵衛商店（春鹿）・奈良豊澤酒造（豊祝）・長龍酒造（長龍）・中谷酒造（萬穰）以上の4蔵の清酒が金賞を受賞しました。金賞受賞酒として発売されている純米大吟醸もあります。

古代ものづくり教室から一土器編

山本 淳史

古代ものづくり教室では例年八月末頃に、4～5日間連続して土器作りに専念します。20人ほどの会員さんが参加されていますが、毎年新しい会員さんも加わり、ベテランさんの今年こそその気持ちと相まって初日は賑やかです。

私たちの土器作りは、粘土素地（ねんどきじ）作りから始まります。素材の粘土は学校教材用と同様の信楽からの購入品です。子供たちはそのまま使用しますが、私たちの土器は炊飯に耐えられる強度と水漏れをなくするため、粘土に砂を入れます。今回も地元の寺川で採った川砂を重量比で15%～20%ほど混入しました。この砂と粘土を一日かけてよく捏ねて馴染ませてから密封し、涼しく暗い場所に寝かしておきます。この寝かすことで粘土にネバリが出てきます。この現象は細菌が活性化して起きると言われていますが、実のところ不明です。粘土素地作りは結構きつい一日仕事です。



粘土素地作りから一週間後、いよいよ土器の成形開始です。寝かしていた粘土素地は作業の前に30分以上かけて、よく捏ねます。この捏ねる作業で粘土中の不要な空気を追い出します。焼成時のひび割れを防ぐには、「捏ねる」これが土器作りの基本です。作業は粘土紐を巻き上げる輪積み成形で器壁を徐々に立ち上げます。作り手により様々ですが、おおむね一日目で井鉢、二日目で深鉢、三日目は午前中に20cm以上の高

さまで積み上げて、午後は内面外面とも叩き手法で器壁のムラをとり、内面調整をして口縁部を作ります。四日目は必要に応じてヘラ削りや磨き、はけ調整などを施して土器成形が終了します。

今回は器高25cm以上の大型甕が5個出来ました。ひとつの甕で約2升のご飯が炊けます。この大型の土器は、陶芸室の電気炉で焼きます。小型の土器は、小学校の野焼きに便乗します。この小型の土器は全て子供たちの土器作りの見本になります。これで土器作りは完了です。この土器作りは私たちも楽しみますが、その主目的は学校支援です。私たちが体験することで子供たちに輪積みなど土器成形の的確なアドバイスが与えられるようになります、また学校支援に必要な土器も補充されます。

ところで、土器制作で知っているようで知らないことがあります。その一つが、粘土とはなにか、粘土を焼くとなぜ固くなるかです。話が少し硬くなりますが、土質工学では、粘土を「砂が分解し水中を浮遊するコロイド状の鉱物が再結晶した粒径0.005mm以下の微粒子（主にケイ酸塩）」と定義しています。この微粒子には吸着した水膜があるので、粒子間が滑りやすくなりネバリが生まれます。次に、この粘土を450℃以上の温度で加熱すると、水膜の蒸発とケイ酸塩が化学変化し元の構造に戻らなくなる現象（不可逆的構造変化）が起きます。さらに加熱して573℃以上になると粘土や砂に含まれている石英の結晶構造が変化し、冷めると収縮して焼土がより強度を増します。この二つの化学変化を応用した焼物が土器です。この土器焼成は人類が初めて、化学変化を伴った作業とのことです。皆さんも学校支援の野焼きでこの化学変化を体験してみませんか。

遺物紹介—垂飾品—

会報編集メンバー

今回は、第1室に展示されている垂飾品2点を紹介いたします。写真のとおり、右側の素材は、イノシシの牙を加工したもの、左側は、テンの歯を加工したものです。



前者は、昭和59年の20次の国道24号線東側の調査地から弥生前期の不整円形土坑より出土しています。土坑では遺物は殆んど含まれていませんでしたが、下層にカシ材の破片や鯨の舟形隆起部の破片があることから木器貯蔵穴(木のアク抜きやひずみの修正を目的とした貯木施設、前期に多く検出されている)と評価されています。その中層からシカの肩甲骨とともに出土しています。

後者は、昭和63年の37次調査で唐古池の西南側の調査地から出土しました。同調査地からは丹塗楯や弓、ト骨や木製牙を差し込んだイノシシの下顎などの特殊遺物が出土しています。

弥生時代の垂飾品は、①縄文系垂飾品②外来系垂飾品(大陸系管玉・ガラス小玉等)③弥生系垂飾品(定形勾玉)に区別されています。縄文系垂飾品は、弥生期の初頭から前半に多く、中期中頃を境に姿を消したといわれています。展示物は、明らかに縄文時代の精神性を継承した一品といえます。

垂飾品は、一般にアクセサリーと捉えられていますが、先史考古学の時代にあつては、単なる装飾品とみるよりはそこに表われている精神性をみたいものです。

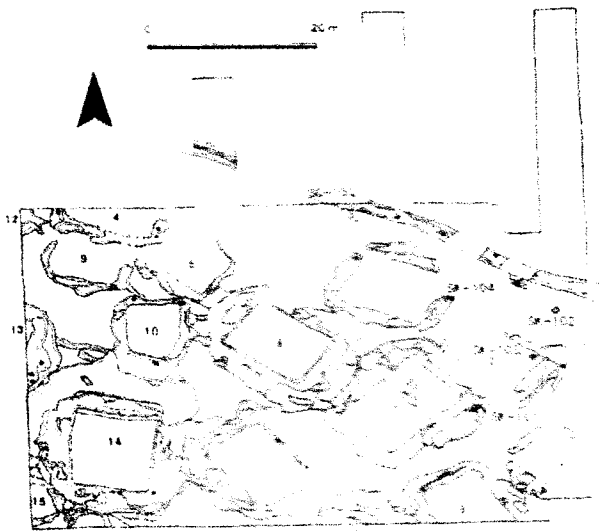
自然の中で採取を中心とした生活をおくっていた時代は、一般的に超自然的存在に対する信仰として「アニミズム」が想定されています。しかし、今回の垂飾品の獣骨に加工している点に着目すると、「トーテミズム」が想定されます。トーテミズムとは、人間と自然との「同質性」に立脚した信仰です。具体的には、採取生活をおくる血縁家族を中心とした集団が、特定の植物、動物その他自然との事象との間に特別な呪術的な親縁関係を認識しそれを儀礼の対象とするものです。アイヌの人たちにも同様の信仰心があつたといわれています。「私は、狼の子孫、鳥の親戚、イノシシの子孫さらにはカミナリの子孫」等というように特別の親縁関係を主張するものです。民族史からみると、北米インディアン、オーストラリア原住民、ポリネシア、アフリカなどに分布しています。よく名前を聞くトーテムポールは、彫刻などでトーテムを表し集団の結束のシンボルとなるものです。

ミュージアムにシャーマン像が展示されています。食糧生産力がそれほど高くない初期農耕社会の宗教的職能者(シャーマン)と評価されます。一定規模の集団を前提として神や精霊との直接交信をトランス状態で行なうことがその特徴とされています。そこには、明らかに個人ないしは血縁家族を中心としたトーテミズムとは異なって、祭祀者といった宗教的専業者への職業分化の兆しがみてとれます。

遺跡紹介（4）—阪手東遺跡

今回は、今年開館10周年を迎えた「田原本町青垣生涯学習センター」の建設に伴い発見された「阪手東遺跡」を紹介します。青垣生涯学習センターの2階には、「唐古・鍵考古学ミュージアム」があります。近鉄田原本駅より、東方・徒歩25分のところですが。

遺跡は、奈良盆地の中央部の沖積地（標高50m前後）にあり、唐古・鍵遺跡の南西1kmに位置します。調査は、1997年と2001年の2回行われました。第一次調査（センター玄関前にある阪手池北側の道路拡幅工事に伴う調査・300㎡）では、弥生期以前の自然河道1条と弥生後期の落ち込み状遺構が検出され、浅い落ち込みの中から完形の弥生後期前半の広口長頸壺が出土しました。発掘を担当された故豆谷和之先生は、供献土器の可能性を指摘され、近くに墓域の存在を想定されました。



4年後の二次調査（調査面積4157㎡）では、現在の図書館がある本調査地南半エリアから、弥生中期中頃の方形周溝墓16基、土坑4基、溝1条、後期の溝3条、土坑1基が検出され、墓域の存在が立証されました。一部の供献土器が据えた状態で検出されており、大和第Ⅲ-1・2

弥生勉強会世話人グループ

様式の土器編年が示されており、中期中葉前半期の方形周溝墓であることがわかります。

墓制から集団の構造を考察する試みがあります。16基の方形周溝墓の主体部をみると、調査地北東側は、西北西→東南東、南西側は南北方向に主軸が向いています。縄文期の環状集落の墓域は幾つかの「群」で構成され、異なった出自集団として評価する意見がありますが、それを弥生期にまで及ぼそうとする意見です。その視点で見ると、出自の異なる二つの集団で墓域が構成されているということになります。

盆地内の方形周溝墓は、前期段階から発見され、中期になるとその数が増します。阪手東遺跡もその一環としてみるができます。14号墓は、長軸14m、短軸11mと大型化し、7号墓・11号墓で土器の供献も認められました。墳丘面積の拡大や副葬品の共伴例の増加など中期段階の変化がよくわかる方形周溝墓です。

発掘当時は、盆地内の方形周溝墓がまとまって検出される例も少なく、その造墓主体は、

1km先にある唐古・鍵遺跡が想定されました。しかし、その後に阪手東遺跡の北に400mの距離にある農業管水路の改修工事（東西250m）に伴う調査で「法貴寺斎宮前遺跡」（関連遺跡として、「小阪榎木遺跡」・「小阪細長遺跡」がある）が発見され、弥生中期初頭から中期後葉の居住域であることから、阪手東遺跡はその集落の墓域とする意見が定着しています。

なお、この方形周溝墓の覆土（弥生期末から古墳期初頭の明褐色粘質土層）からは、畦畔状の遺構と足跡が見つかり、利水施設を伴うとみられる溝が検出されたことから、弥生後期には墓域から生産域に変更されたことをあらわしています。この時期の生産域の拡大は、盆地内の他の遺跡でもみることができる現象です。

第11回 弥生勉強会に参加して

大森 初美

穏やかな天候に恵まれ、畝傍御陵駅を定刻に出発し、元薬師寺を經由して橿原市四分遺跡に15分ほどで着きました。当日に配られた資料にカラーの「明日香地域の地形分類図」があり、行程が、①扇状地性低地→②低位段丘面→③高位段丘面と、徐々に地形的に上昇するものであることが分かりました。

配布資料を参考に、行程を改めて確認してみました。

四分遺跡は、弥生前期中葉から後期末まで存続し、中期初頭より遺物量が増加し、後期以降は遺物量が多くなり、後期後半にその盛期を迎え、この地域の拠点集落と位置づけられているとのことでした。扇状地性低地といっても標高72mもあり沖積地の唐古・鍵遺跡の47mと比べると高いところにあることがわかります。遺跡範囲は現在の飛鳥川左岸におよぶ東西250m以上、南北600m以上あり、居住域、それに近接する生産域(水田跡)や環濠の配置、それらに規定される墓域の位置関係等の説明がありました。意外に発掘が進んでいて、唐古・鍵遺跡と異なり遺跡の重要な構成要素である居住域、環濠、生産域、墓域が判明しており、ピークで最大25～30名程度という弥生期の標準的な集落の様子がよく分かりました。

最後に金属器で殺傷された2体の人骨の説明がありましたが、弥生後期の社会的緊張の現われとする見方には、高地性集落の発達が顕著でない盆地内の稀有な事例ということもあり少し疑問に思いました。

次いで、最低位の段丘面に位置する明日香村の小山にある遺跡群(紀寺跡遺跡・紀寺南遺跡・

耳成線1次遺跡・2次遺跡)、明日香村の奥山にある遺跡群(左京十二条5坊遺跡・奥山久米寺

遺跡・山田道遺跡・飛鳥藤原京104・105次)を順次確認できましたが、いずれも弥生中期以降の活動痕跡しかなく、竪穴住居・土坑・溝等の遺構や弥生土器、石器片や石包丁等が見つかったとのことでした。



次いで訪れた飛鳥遺跡(石神遺跡、水落遺跡)岡遺跡(飛鳥京下層)、島庄遺跡(石舞台遺跡下層)になると縄文晩期と弥生前期の遺構(配石遺構、土器棺墓、竪穴住居等)・遺物(土器・石器片・特殊遺物等)が出土するなど低位段丘から高位段丘に移行する範囲は、明らかに小山、奥山地区とは時間的にも出土遺物にも違いがあることがわかりました。

また、縄文後晩期及びその名残を残した弥生前期に集落が存続した理由を、山地や低地が傍にあるという地理的優位性を利用した採取生活が可能だったとする説明にも納得ができました。

今回は、明日香村の馴染みの深い遺跡ばかりでしたが、その下層に縄文時代から弥生時代の遺構や遺物があり、その延長線に盆地内の拠点集落の四分遺跡あるなんて驚きでした。

平成 26 年弥生企画展レポート

谷口敬子

1 概要

唐古・鍵考古学ミュージアムにて、平成 26 年秋季企画展「弥生遺産Ⅱ～唐古・鍵遺跡の木製品～」が 10 月 25 日より開催されています。展示の木製品は、100 点ですが、初公開はその内 73 点とのことで、初見の展示物が多いというのも魅力です。唐古・鍵遺跡の田原本町調査分は、第 3 次～115 次で昭和 53 年から現在まで 42 年間ですが、木製品は 5000 点以上出土しているとのことで、今回はその一部ということになります。

2 展示品について

今回の展示品の目玉は、第 93 次調査の大型建物跡のケヤキ柱(直径 83.2cm)ということですので。炭素 14 年代測定法では、BC275 年～BC170 年の数値を示しているとのことで、弥生中期中葉の時期では最大級のケヤキ材です。今回は、企画展にあわせ、黒田龍二先生の「唐古・鍵遺跡大型掘立柱建物の復元」の講演会が開催されるのも興味があります。

展示品は、「生活を支える木」という視点で、住環境を支える建築材や住まいの道具、食を支える木器として農具、調理具、狩猟具・漁労具そして日常生活を支える道具として織物・編み物の道具、食膳具などさらには武器・儀礼用の木製品が展示されており、実に多様です。

また、「暮らしを支える技術」という視点で、木材の伐採、加工についてもきめ細かく展示されています。特に、轆轤の使用や漆の使用について多くの展示がなされていました。

展示は、木製品に限定されていることもあり、展示品の説明は、樹種を特定し、樹種に適合した用途を丁寧に示されており、当時の唐古・鍵遺跡の生活や技術を知ることができました。

3 最後に、企画展をご担当された木村麻衣子学芸員にお話しをうかがいました。

(問) 今回は、展示物の数も多く、図録も精緻で分かりやすいですが、何時ごろから準備をされましたか？

(先生) 4月に着任し、5月から準備を始めました。

(問) ご苦労された点はどこですか？

(先生) 木器の数がとても多く、さらにその大小もあります。できるだけ多く展示したいと思い、展示ケースに収めるのに苦労しました。

(問) 展示の見どころは、どこですか？

(先生) 同じ木を素材としても用途や形、大きさが様々です。それら多種多様な木製品が唐古・鍵遺跡というひとつの遺跡から出土しており、その木器を通じて唐古・鍵遺跡の生活、文化に触れていただければ幸いです。また、それだけのモノをつくることのできた唐古・鍵遺跡が有していた木工技術力も見ていただきたいです。

(問) 最後に一言お願いいたします。

(先生) 展示は木製品のみです。これだけの多くの木製品を間近に見る機会は少ないと思います。是非、お越しください

小学校の総合学習支援活動

2学期の町内の6年生を対象とした総合学習は、順調に行なわれており、10月2日東小学校(20名)土器作り、その翌日の3日には北小学校(30名)の土器作りを行ないました。10日には炎天下の中、平野小学校の土器野焼きを行いました。この時期の野焼きは、本当に肉体的に消耗しました。日焼けならず火焼けで、顔や胸、手が真っ赤に焼けました。平野小学校は、24日に火熾しと土器炊飯を行ないました。

11月になりますと、6日には東小学校の土器野焼き、20日には同じく東小学校の火熾しと土器炊飯を行い、25日には例年のおお、北小学校の土器野焼きで今年度の予定を終了いたします。

今西 和代

す。子供たちが4時間もかけて一生懸命作った土器です。熱さを、ものともせず野焼きを頑張ります。写真は、平野小学校の火熾しを頑張っている子供たちとその傍で土器炊飯の準備をしている会員です。



お知らせ 事務局

訃 報

創立当時の会員で、今年を含め永年運営委員として会の活動にご尽力をいただいた

川原 忠美 さんが、急逝されました。

心より、ご冥福をお祈りいたします。

会報の「からこかぎ」の題字は、川原さんをお願いしたものです。

本当にお世話になりました。

しめなわつくり

日 時 12月26日(金) 9時～

場 所 青垣生涯学習センター1階陶芸室

参 加 事務局に電話かメールで申込んで下さい。

定 員 20名

材料費 会員は、無料です。

非会員の方は、500円をお願いします

企画展・講演会

○ 秋季企画展「弥生遺産Ⅱ」開催中(会員無料)

○ 講演会「唐古・鍵遺跡 大型掘立柱建物の復元」

11月8日(無料)

○ 講演会・シンポジウム(11月22日)

「ヤマト王権はいかにして始まったか」(有料)

詳細は、同封チラシをご参照ください。

遺跡の清掃

日 時 12月10日(水) 10時～12時

場 所 ボランティア室集合

清掃終了後、団栗クッキーの試食をします

参 加 自由参加です。

編集委員

井上知章 植田洋高 大森初美

谷口敬子 花坂志郎 福島道昭